

---

# 東方灰景番外集

風神玲衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方灰景番外集

### 【Nコード】

N8352Y

### 【作者名】

風神玲衣

### 【あらすじ】

番外を集めた短編的な何か。

妖は何を志さず。

「ええと……酒屋さんは」

とある平和な昼下がり。

賑やかな人里の通りを歩く、一匹の鬼がいた。

鬼の名は、志妖。

妖怪の山に住む数少ない鬼の一匹であり、その姿からは想像出来ない、途方もなく長い時間を生きている妖怪でもある。

同じ鬼であり、志妖が主人として敬っている魅王桃鬼と同じ一本角。

性格は鬼としては珍しく非常に温厚かつ冷静で、滅多なことでは怒らないし襲い掛かったりしない。人間と接する時もそれは変わらず、故に彼女を恐れる人間は少ない。

しかし、だからといって彼女に喧嘩を売るような真似をする人間（妖怪）は少ない。彼女自身の強さが化け物じみているからである。本人は「私が化け物なら、桃鬼様やミコトさんは一体何者なんでしょう」と言うが、他から見れば三人とも五十歩百歩、全員化け物には変わりはないのだが。

そんな彼女にも、ここ最近悩み事があった。

それは……………。

「あうっ」

元気に走り回っていた子供が、志妖にぶつかって転んでしまう。

志妖はそれを見て、慌てて子供に手を差し延べるのだが……。

「うわあ~~~~~!!」

「あっ…………」

志妖を見た子供は、転んだ痛みも忘れたように凄い勢いで走り出し、とある建物の中に消えていってしまう。

それを見た他の子供達も、志妖の姿を見ると慌てて同じ建物の中に消えていった。

「な、なんだ、どうしたんだお前達」

立ちすくむ志妖の耳に、建物の中から聞こえる声が。

声の主は、建物 寺子屋から飛び出し、志妖の姿を見て一気に脱力していた。

「また君か……」

「すみません……」

そう。

彼女の最近出来た悩み事。

それは。

……なぜか、致命的なまでに子供に嫌われていることだった。

「ただ今戻りました」

「ああ、お疲れ様」

妖怪の山のある洞窟。そこが志妖、そして桃鬼の住む場所である。志妖は身の丈の半分はある酒樽を二つ、地面に置くとふらふらと洞窟の奥へ姿を消した。

「あれ？志妖、しょう？」

「元氣無いね。何かあったのかな」

志妖を呼ぶ桃鬼の後ろ、洞窟の壁に腰掛けて数匹の猫にねこじやらしを振っていた男がそう言った。頭にある耳をピクリと動かしている。

彼の名はミコト。本人は基本的に長生きなだけの妖獣だと言わないが、実は志妖以上、桃鬼に次いで長く生きている猫の妖獣である。人里に残されている文献の中に記された『伝説の妖獣』とは、紛れも無く彼のことだが、普通に人里に出入りするので伝説とはい難い。

彼は、一匹の猫を膝の上に乗せて桃鬼に聞く。

「むう……なんだか悩んでいるみたいだね。桃鬼、何か知らない？」

「調べたのかい？」

「調べたというか、入ってきたというか」

ポリポリと頭を掻くミコト。

彼の能力『感情を操る程度の能力』は、文字通り相手の感情を操ることが出来る。が、感情を操る為には、まず相手の感情を取り込んで理解しなければならぬ。しなければならぬと言っても、少し強めな感情なら基本黙っていても彼に勝手に入ってくる。

先程は志妖の感情を取り込んで、どんな精神状態か理解した、というわけだ。

「悩みねえ……。あの娘はあまりそういうのを表情に出さないからねえ」

「確かに」

よっこいせ、と酒樽を傍らに置いて座り直す桃鬼。

中から酒を桶で掬い、瓢箪に入れていく。

桶に少し残った酒を口に入れ、桃鬼は外を眺めている。

「ミコト」

「わかってるよ」

「悪いね。アタシがなんとかしてやりたいんだが、アタシ相手だと志妖はどうしても畏まるから」

「何、志妖には助けられてるからね。じゃあ行ってくるよ」

胸に猫を抱え、ミコトは洞窟を飛び出していく。

その様子を、桃鬼はただ眺めているのだった。

「それにしても、悩み……ねえ」

「到着、と」

気まぐれで弾幕に乗ってきたミコトは、なんの躊躇いもなく飛び

降りて軽やかに着地した。周りの人間が驚いているのを見て、舌を出してごまかしてみる。

「なんだ、ミコトじゃないか」

「慧音。ちょうどよかった」

ミコトに声をかけたのは、寺子屋の先生で半獣でもある上白沢慧音だ。買い物の最中だったのか、脇にかかえた籠の中には様々な食材が入っている。

「ちょうどよかった？ 何がだ」

「いや、少しばかり聞きたいことがあってね」

「……？ そうか。なら私の家に行こう。立ち話も何だからな」

「ありがたい」

「で、話とは？」

ミコトにお茶をすすめ、自分のぶんのお茶を入れながら慧音はそう聞いた。

ミコトは、湯気が立っているお茶をしばらく見つめ、慧音がお茶を入れ終わったところで口を開く。

「志妖のことなんだけど」

「志妖？ ああ、鬼のことか。彼女なら今日も人里に来ていたが、どうかしたか？」

「おお、好都合だ。志妖の奴、何か悩んでる様子なだけけれど……。何か知らないかな」

「悩んでいる？ ……ふむ。私が彼女と顔を会わすのは、決まって寺子屋の子供達が彼女から逃げてくる時なんだが、もしかしてそれのことか」

「子供達が？」

うむ、と頷いた慧音。お茶を一口含んだ彼女は、一息ついてまた話し始める。

「どういうわけか、彼女は子供に致命的なまでに避けられていてな。酷い時は逃げていく程だ」

「ふうん……。志妖が何かしたのかな」

「いや、そういうわけでもないらしい。事実、彼女が人を傷付けた話は全く聞かないしな」

それはそうだ、とミコトは頷いた。

志妖は好き勝手に暴れる妖怪ではない。鬼にしては珍しく、争いごとが嫌いな平和主義者なのだ。というより、志妖が暴れたら人里の一つや二つ簡単に吹き飛んでしまう。

「ならなんで……」

「私が思うに、彼女の表情のせいではないかな」  
「表情？」

「ああ。私達や大人の人間は、彼女の性格を知っているから怖くはない。だが、子供達は違う。彼女は普段無表情の仏頂面だろう？それが怖いのではないのかな」



ああ……と納得した様子で頷くミコト。  
確かに志妖はあまり感情を顔に出さない。驚いても喜んで怒っても悲しんでも、表情の変化は微々たるもの。  
勿論感極まれば表情も変わるが、多少のことでは見た目には現れないのが志妖という妖怪なのだ。

「なるほど……。志妖の悩みは十中八九それだろうな。わかった、ありがとう慧音」

「そうか？ 役に立てたのならよかった」

「うん。このお茶を飲んだら行かせてもらおうとしよう」

そう言ったミコトは、未だ湯気が昇っているお茶をほんの少しだけ啜って、また机に置く。

「……………まだしばらくいるつもりか？」

「猫舌なもので……………」

その頃志妖は、

「おいで。ほら、あなたも。大丈夫……………怖くないから」

洞窟の外、森の中で動物達と触れ合っていた。

切り株に腰掛けた彼女の右肩に小さなリスがぺタリと座って、伸ばした左腕には三羽の小鳥。足元には狼が尻尾をパタリ、パタリと動かしながら伏せている。

「あなた達は私が怖くないんだよね……。けど、人間の子供達は……」

はあ、と珍しい溜め息をつく志妖。左腕を降ろすと小鳥は一度飛び立ったが、またすぐに戻って垂れた頭に乗っていた。

と、その時。

「……………?」

小鳥は一斉に飛び立ち、リスは志妖から飛び降りて一目散に森の中へ消えていく。狼は立ち上がると、ある方向へ向かってグルグルと唸り始めた。

「誰ですか?」

「……ハラ、ヘッタ」

「そうですか。それで?」

「ソノケモノ、ヨコセ、ヨコセ!」

現れたのは、身体が大きな蜘蛛らしき妖怪だった。

その姿を見た狼は、耳を垂れて少しずつ後退りをしていく。

「残念ですけど、この子は渡せません。人里にでも行って人間を驚かせてくればどうでしょう」

「イヤダネ。ニクガクイタイ」

「……どうしても、ですか」

志妖は思う。自分にこれだけ向かってくる妖怪は久しぶりだ。  
果たしてこの妖怪は、自分のことを知っていてなお、そんなことを言っているのか、と。

「ヨコセ、ヨコセ!!」

蜘蛛妖怪が、脚の一本を振り上げて狼へと振り下ろすが、

「ア……………」

「言っただけですが……。この子は、渡せない」と

振り下ろしたはずのその脚は、根本から消えていた。  
ワンテンポ遅れて蜘蛛妖怪の絶叫が辺りに響き渡る。

「今ならまだ追いはしません。だから……………」

「アアアアア!!」

錯乱しているのか、蜘蛛妖怪は志妖の言葉を聞きもせず彼女に襲いかかった。

狼を抱き抱え、攻撃を避けていく。

「…………恨むなら、自分を恨んでくださいね」

攻撃の合間。その一瞬で志妖は大きく距離をとる。  
そして、右足を高々と真上に振り上げ

「さようなら」

振り落としたそれから生まれた半月状の波動が、蜘蛛妖怪の身体を真つ二つに切り裂いた。

狼を地面に下ろし、慌てて逃げていくその姿をただ見つめる。

しばし狼が去ったその方向を眺めた後、志妖は踵を返して洞窟へ向かうのだった。

「お帰り。志妖」

「桃鬼様。お出かけですか？」

帰った志妖を出迎えた桃鬼は、ちょうど洞窟から出ていく所だった。

「ああ。ミコトが洞窟にいてくれるというからね。たまには私も人里に行ってみようかと」

「そうですか。いつ頃お帰りに？」

「さて、いつになるだろうか。ハッハッハ！」

快活な笑い声を上げながら、答えになっていない返事残して桃鬼は飛んでいった。

まあこんなことは日常茶飯事だ、と特に疑問も抱かず、志妖は洞窟の中へと足を踏み入れる。

「と、いうことは……」

と、そこで彼女は数歩進んだ所で立ち止まった。  
そして考える。

たった今、この洞窟の主人は出掛けていった。  
代わりに洞窟に居るのは、尊敬していて、しかしあまり話すことができないあのお方。

そして、入れ違いで洞窟に帰ってきた自分。

「……………これは、チャンス？」

若干顔を赤らめた志妖は、少しだけ緩んだ表情で、止めた足をも  
う一度踏み出した。

「お帰り、志妖」

「はい。ただ今帰りました」

「固いなあ。お帰り、って言われたら、ただいまでいいんだよ？  
ほら、もう一回！」

「あ、え？……た、ただいま、です」

「です、が余計だけどよくできました」

お帰り、と笑顔で言う目の前の猫に、志妖は照れ笑いを微かに浮かべた。

そのまま歩みを進め、ミコトをちらりと横目で見てから、彼から少し離れた場所に腰掛けた。

が。

「にゃっ」

「きやつ……」

猫の姿に変化したミコトが、志妖の膝の上に跳び乗っていた。思わぬ事態に、さすがの志妖も驚きを隠せない。

だが、灰猫はそんな志妖をよそに気持ち良さげにゴロゴロしている。二又の尻尾が志妖の足をサワサワと撫でるように動いていた。

「ミ、ミコトさん？」

「いや、よくよく考えたら志妖の膝に乗ったことがないなあ……と嫌だったらどきますが」

「い、いいえ。ミコトさんが良ければ私は構いません」

「……そう？　なら、甘えさせていただきます」

少しだけ身体を浮かせたミコトは、しかしまたすぐに身体の力を抜いた。

若干オドオドしながらも、その姿を見て笑顔を零す志妖。やがてその手は自然とミコトの身体を撫でていた。

「ねえ、志妖？」

しばらくそのまま大人しくしていたミコトだったが、不意に身体を起こして志妖の顔を見た。

灰色の瞳が自分に向けられたことに少しだけ驚いた志妖。

「は、はい？」

ピタッと止まった志妖の手から抜け出し、人型に戻ったミコトは

すぐ横に腰を下ろした。

そして、志妖の顔をまじまじと見つめ、

「ひゃっ……」

その手がふわりと、志妖の髪に触れていた。いきなりのに志妖の頬は真っ赤に染まり、しかしそれを悟られまいと俯く。が、

「失礼」

そんな一言が志妖の耳に届くと同時、ミコトは彼女の肩に手を当て抱き寄せた。

抵抗なく志妖の身体はミコトの腕の中に収まり、気が付けば志妖の頭はミコトの膝の上。俗に言うひざ枕の状態になっていた。

「今度は志妖の番。たまには甘えるのもいいもんだよ？」

「……………」

ミコトの言葉の意味がわからず、志妖はミコトの膝の上で首を動かして彼の表情を見た。

会話が繋がってない、と言おうとして、けれどその笑顔を見てしまえばもう何も言えない。

そつと額に添えられたミコトの手は、志妖に心地好い温もりを与えて。

「…………『遠慮』は、無しね」

ミコトがそう言った直後、志妖の中、何かの蓋が開いていた。

「おっと」

「……………」

ギュツ、とミコトの身体が抱きしめられる。

身体を起こした志妖は、真っ赤な表情をしているにも関わらず、ただ素直に彼の身体を抱きしめていた。ミコトはそれを咎めるわけでもなし、自分の肩に寄せられた志妖の頭を優しく撫でる。

「志妖。普段の君に足りないものはなんだと思う？」

「足りない、もの？」

「そ。今の志妖にあつて、さっきまでの志妖にはなかったもの。わかる？」

「……………わかりません」

そう言いながら、志妖はさらにギュツとミコトを抱きしめた。

本当は、いつだってこうしたかった、と志妖は考える。

遙か昔、自分の気持ちに気が付いた時から、ずっと。

隣にいれば胸が高鳴り、離れていれば心は焦がれ。

ただただ想いだけが募り、しかしそれを行動に移せない、素直じゃない自分に呆れる毎日。

「あ……………」

「わかった？」

「はい。……………なんとなく、ですが」

「ん。それを言葉に」

「……………素直な心、ですか？」

正解、と耳元で囁かれ、志妖の身体がビクツと震えた。

「志妖は昔から自分を出すのが苦手だったからね。それは今でも同



じみただから、ちよつとばかり操らせてもらつたんだ。志妖が『素直』になれるように、ね」

こうなるのは予想外だったけど、と頬をポリポリ掻きながら呟くミコト。少し顔が赤くなっているのだが、志妖はそれに気付かない。

「ま、なんでこんなことしたのかってことだけど。……もう少し素直になれば、志妖の悩み事も簡単に解決するんじゃないかと思ってさ」

「……誰から聞きました？」

「某寺子屋の某先生」

「う……。あの方にはいつも迷惑を……」

体勢そのまま、志妖は小さくなった声でそう呟いた。

少し身体を離し、ミコトと顔を向き合わせる。

「でも、どうすればいいのでしょうか……」

「うん？ 簡単さ。思ったことを素直に表に出せばいい。それが言葉か、表情か、はたまた行動として現れるか。それだけだよ」

今みたいだね。と悪戯っぽい笑みを浮かべるミコト。

すでに顔の赤みは引いている辺り、自らの感情を操っていると思われる。

志妖はそんなミコトの言葉を聞いて、恥ずかしさを紛らす為に顔を手で覆い

「「！」「」」

同時に、二人は洞窟の外へと顔を向けた。

志妖が立ち上がり、ミコトが一瞬で洞窟の外へと跳びだす。

「これは……」

「なんて強大な妖気……！ しかも、これは人里からだ！！」

「行きましよう！」

「ああ。僕は先に行ってる。志妖も早くね」

「はい！」

ビシッ、と木の葉を撒き散らしながら、ミコトは森の中へと消えていく。

志妖も地面を蹴り、空へと飛び上がる。

「子供達が……！！」

額に汗を滲ませながら、志妖は全力で飛んだ。

人里の上空に辿り着いた志妖は、迷わず地面へと降り立った。辺りには強力な結界が張られており、それがミコトによるものと理解。空から侵入するのは難しく、しかし地上に一部分だけ力が弱い場所があるのを見付け、志妖はそこから侵入した。その先にいたのは、

「子供達を離せ！人里では人間を襲ってはいけないとわかっているだろう！」

「卑怯者め。子供を盾にするなんて恥ずかしくないのか」

人里の守護者と、灰色の妖獣の後ろ姿。そして、

「ヴルザイ！ ハヤグアノオニヲツレテゴイ！！」

「うっ、ああ……」

身体の中に真っ赤な一本線を入れた蜘蛛妖怪と、恐怖に顔を引き攣らせている子供達の姿があった。

蜘蛛妖怪を見て目を細めた志妖は、小走りでミコトに駆け寄る。

「ミコトさん」

「志妖……。来てみたらこの有様さ。あの妖気はコイツのものだったみたいだ」

「そうみたいです。……しかし、おかしいです。あの妖怪は、私が先程殺したはずなのですが」

「なんだって？」

志妖の言葉に、思わず振り向くミコト。それに志妖は頷きで返し、二人の隣に並んだ。

「子供達を離しなさい。いろいろと聞きたいことはありますが、先ずはそれから」

「オマエッ！ オマエダ！ オレヲマッパダヅニシヤガッデ！

ゴロズ、ゴロジテヤルッ！」

「……………」

蜘蛛妖怪は志妖の言葉を遮り、耳に残る濁った声で叫んでいた。

志妖は口を閉じ、その視線を蜘蛛妖怪ではなく、その前にいる子供達に向けた。

十人程いる子供達は、すでに数人気を失ってしまっている。かろうじて意識を保っている子供達も涙で顔が濡れ、その恐怖で表情がくしゃくしゃに歪んでいた。

それを見た、志妖は。

「……わかりました。私が目的なら好きにして構いません。だから子供達を……」

「志妖……？」

「なにを……！」

志妖の言葉に目を見開いた二人を手で制し、息を吐いて足を踏み出す志妖。

「さあ、子供達を」

言いながら歩みを進め、蜘蛛妖怪の足元までいって志妖は立ち止まった。それを見た蜘蛛妖怪は、なんとも嬉しそうにその表情を歪める。口からボタボタと液体がこぼれ落ちて、

「ッ!!」

ビシッ、と志妖の頬から鮮血が飛び散る。思わず顔をしかめる志妖だが、またすぐに無表情に戻って口を開いた。

「早く子供達を離しなさい」

「ギャギャギャッ!! ダアレガソナコトイッタ!？」

「!?!」

急に笑い出した蜘蛛妖怪に驚いた志妖。その瞬間、志妖の身体は妖怪が吐き出した蜘蛛の糸で拘束されていた。同時に反対の頬からも血が噴き出す。

「志妖ッ！」

反射的に飛び掛かろうとしたミコトだったが、その瞬間蜘蛛の脚が子供の頭に突き付けられる。それを見た慧音がミコトを捕まえて、その体勢のままギリギリと歯を食いしばった。

「卑怯者め……！」

「ギャギャギャギャギャギャッ！！！！！」

目をつぶっていた志妖の身体に、ドドドッ！ と蜘蛛の脚が突き刺さった。

何度も何度も、抜いては刺されが繰り返される。

その度に赤色が地面に染みをつくり、しかし志妖は倒れずに言い続けた。波動を操れるようになってからもほとんど大きな声を出すことが無かった志妖だったが、少しずつその声は大きくなっていく。

子供達に手を出すな。

私はどうなっても構わないから。

ドシュッ、と突き刺さっていた脚が抜かれ、グラリと志妖の身体が揺らぐ。

「ゾロソロゴロジテヤルッ！ マップダツニシテヤロウ！！ ギャギャギャギャ！！」

狂ったように笑う蜘蛛妖怪は、愉悦の笑みとともに一本の脚を振り上げた。ボタボタとこぼれ落ちる涎が志妖の身体に当たり、しかし志妖はそれに反応すらしない。

それをしばらく満足げに眺めた蜘蛛妖怪は、口が裂けたような笑みを顔に張り付けて

「ギャギャギャギャッ！！！！」

その脚を、志妖目掛けて振り落とした。

「……………ア？」

振り落とした、はずだったのだが。

「汚い脚だねえ」

「！！？」

いきなり聞こえてきた声に、何が起きたのかもわからないまま蜘蛛妖怪は振り返った。

そこには。

「アンタ……もう目の目は拝めないと思うんだね」

グシャツと手に持っていた脚を握り潰し、周りの家がギシギシと軋む程の妖力を発する鬼の姿があった。

その姿を見たミコトは、思わずここら一帯を覆っていた結界を解除した。あのままだと桃鬼の妖力が中に籠り、下手をすれば子供達が死んでしまうかもしれないからだ。

「ミコトッ！」

「わかってますともっ！」

「ナッ！？」

視線を戻した蜘蛛妖怪。しかし、そこにもう人質は存在しない。

少し離れた場所、ミコトが志妖を含む全員を救出していた。

「大丈夫か、志妖」

言いながらミコトは志妖を捕らえている糸を切り捨てた。同時に能力を使用、生命力を分け与えて傷を塞いでいく。

おおかた傷が塞がったところで、志妖とミコトは立ち上がった。

「ア、アアアアッ！！」

「五月蠅いねえ。存在が不愉快だ」

自暴自棄になって二人に襲い掛かる蜘蛛妖怪。が、いきなり蜘蛛のすべての脚がグチャリと潰れていた。背後には、髪を掻き上げる桃鬼の姿。

「ガアッ……………」

次の瞬間、蜘蛛妖怪の身体に薄桃色の花が咲いていた。

「本当なら僕が消し飛ばしたいところだけど」

その間に懷に潜り込んでいたミコトが、その身体を掴んで全力で跳躍。さらに空中で蜘蛛妖怪を蹴り上げて、その反動で地面へと急降下。

不自然なまでに軽やかに着地したその隣には、珍しく怒りを現わにした志妖が立っていて。

「…………子供達を人質に取った貴方には、もう容赦しません」



両手で作ったその円を、ゆつくりと口元へと近付けていく。

「今回は」

「ヤ、ヤメロ！ ヤ、メデクレエエエ、エエ！！」

塵も残さず、消してあげます。

「ガア……ギヤアアアア、アアア！！」

次の瞬間、全てを破壊する滅びの咆哮が蜘蛛妖怪を消し飛ばした。

「ん？ あれは……」

しばらく蜘蛛妖怪が散った空を見上げていたミコトだったが、そ

ここに何かひらひらと舞うモノを見付ける。

ゆっくりと落ちてきたそれを手に受け止め、これは、と小さく呟いた。

「これ、紫のリボン……なるほど、あの蜘蛛の妖力はこれのせいだったか」

言いながらとりあえず右手首に付けておくミコト。

本来このリボンはミコトが身につけているものだが、結界から解放された拍子に式になる為の術が解けてしまっていた為に、一旦紫に預けていたのだ。

こうして身につければわかるもの。どうやら初期化したらしく、式の術も構成ささっていないければ封印の術も付与されていない。ミコトと紫の妖力が籠っている以外は普通のリボンだ。

「紫が落としたのをあの妖怪が拾った、ってところかな」

紫ならわざとの可能性もあるけれど、と改めてミコトは空を仰ぐ。雲が吹き飛んだその空は、驚く程に真っ青だ。

視線を落とす、ミコトは志妖の姿を捜す。傷は塞いだが、万が一もあるかもしれない。

何ならもう一度命を分け与えるつもりで、見付けた志妖に声をかけようとして、

「……取り込み中、かな？」

その様子を見たミコトは、尻尾をふらりと揺らして呟いていた。

「ほら。この方がお前達を助けてくれたんだぞ」

慧音がそう言って、十人の子供達の後ろに回る。

子供達は、目の前に立つ鬼の姿をおっかなびっくりと言った様子  
でしばらく見つめ。

「……………」

それを見た志妖は、ほんの少し悲しげな笑顔を子供達に向けた。  
踵を返し、しばらく地面を見つめる。

ほんの少しだけ唇を噛み締め、振り切るように顔を上げ、

「それでいいの？」

「っ！」

その先にいたミコトが、志妖を見つめていた。

ミコトが発した言葉は、その一言のみ。しかし、その一言には沢  
山の意味が込められているのを志妖は知っている。

だが、志妖にはどうすればいいのかわからなかった。

何をすればいいのか、それすらも思いつかずただ立ち尽くす。

逃げ出したくなるような、後悔すら感じられるこの時間の流れ。

「……………」

そして、それに耐え切れなくなった志妖が、地面を蹴って逃げ出  
そうとした瞬間。

キュッ、と。

下手をすれば気づかないくらいの小さな力で、その手が握られていた。

「っ!？」

驚いて振り向いた志妖。

そこには、無垢な表情で彼女を見上げる女の子の姿。その手は、志妖の左手をしっかりと握りしめていて。

志妖が言葉を発するより先に、女の子は笑顔でこう言った。

「……ありがとう」

その一言が聞こえたミコトは、嬉しそうに表情を緩めてその風景に背中を向けた。

一軒落着、かな。

そう呟いた彼の背後。子供に囲まれ、嬉しそうに涙を流す志妖の姿があった。

「や」

「あ、ミコトさん」

あれから三日。何の気無しに洞窟を訪れたミコトを、いつも通りに志妖が出迎えた。

身体を傾けて洞窟の奥を見て、ミコトは首を傾げる。

「桃鬼は？」

「萃香と特訓らしきものを」

「ああ……」

湖の妖気はそれか、とカクンとうなだれるミコト。

テクテクと歩き、桃鬼作の変に柔らかい木の椅子に腰掛ける。  
壊れそうで壊れない不思議な感触を楽しんでいると、不意に背後からフワリとした香りがミコトを包んだ。なんだ、と思った時にはもう遅く。志妖の腕が、ミコトの首に絡み付いていた。

思わず固まったミコトは、視線だけを慌ただしく動かして口を開く。

「……志妖？」

「なんでしょっか」

「こちらこそなんでしょっか」

微妙に変な言葉遣いになっているミコトを無視するかのようにな、志妖はさらに身体を密着させる。

「ミコトさん、私に言いましたよね。『思ったことを素直に表に出せばいい』って。……私は、それを実行しているだけです」

言つて、愛しげにミコトの髪を梳く志妖。

ミコトはそんな志妖の想いを文字通り身体で感じ、ただただ身を任せるばかりであつた。

「これからは素直にいかせていただきます」

「桃鬼の前では」

「素直にいかせていただきます」

「……マジで？」

「マジです」

白黒灰色：最初は単なるすれ違い

「や。待った？」

「いんや。今来たところだぜ」

とある丘の木の下。

先に来ていたらしい魔理沙の頭に手を置きながら言うと、魔理沙は笑顔でそう返してきた。けれど僕は知っている。彼女は絶対と言っている程僕よりも早く待ち合わせの場所に来て、ずっと僕のことを待っていてくれることを。

頭から頬へ、その輝かしい髪に指を通してながら手を移動させる。魔理沙の頬は少し熱いくらいで、照れていることがまるわかり。けれど僕はあえてそれを伝えない。頑張って隠そうとしている魔理沙だって、たまらなくかわいいのだから。

「今日はどうする？ また肩に乗って空中散歩でもするか？」

「それも魅力的だけど、今日は人里に行こうかなと。美味しいお茶を出してくれる店があるんだ」

「そうか？ ならそうするか。さ、行こうぜ」

とん、と箒に腰掛ける魔理沙。魔理沙は自分の肩をトントンと叩いて、早く乗れよと赤い顔で言ってくれる。

僕は猫の姿に化ける前に、一言ポツリと呟いた。

「リボン。かわいい」

「あっ……」

気付いてないとも思ったか。

いつもは白であるはずの、魔理沙の帽子についているリボン。し

かし、今日はそれが淡い桜色。きつと恥ずかしくて、けれど精一杯のお洒落をしてきた結果なのだろう。

僕の言葉にさらに顔を赤くした魔理沙は、しかしニヤニヤと笑いながら僕を肩に乗せる。そして一度顔をすり合わせると、ゆっくりと空を飛びはじめた。

「へえ。賑わってるな」

「うーん……これは……」

「ミコト？　どうかしたのか？」

いいや、と魔理沙に軽く返しておく。

魔理沙の言葉通り、今日の人里は何時にも増して賑わっている。今日何かあったかな、と首をひねり、まあいいか、と魔理沙の手を取る。

「なっ、人前で」

「こういうのは人前でやるからいいんじゃない」

今までも手を繋ぐくらいは普通にしていたが、やはりこれだけ沢山の人の前では恥ずかしいらしい。

うう……と、空いた手で帽子を深く被る魔理沙を見て、僕はちょっとした悪戯を思い付く。



「でもまあ、恥ずかしいならやめようか」

「え？ あっ」

言うが早いか、僕は不意に魔理沙の手をパツと離してみた。魔理沙がわかりやすく動揺しているのを見て、胸の辺りが熱くなる。

すぐに手を取り直したい衝動に刈られたがそこはぐっと我慢。僕は魔理沙に背を向けてスタスタと歩き始めた。さて、どんな反応を見せてくれるのか……と、考えてすぐに、右手がガシツと掴まれた。

「いじわるだぜ……」

「……」

背後から聞こえた声に、見事に僕の心は撃ち抜かれる。きっと後ろでは、顔を赤くした魔理沙が俯き気味に立っているのだろう。これが二人きりだったら間違いなく抱きしめているであろう破壊力。弾幕だけではなく恋愛もパワーだぜ。そう言われても納得してしまいそんな威力が今の魔理沙にはある。

ニヤニヤが止まらなくなりそうだったので左手で自分の顔を揉みながら、僕は魔理沙の手を引いて、今度こそ歩き始めた。

で、特に何の問題も無く目的の茶屋に到着。適当にお茶菓子を注

文し、椅子に腰を落ち着かせる。

僕の隣に座った魔理沙は、しばらく黙り込むと、何を思ったか急に自分の帽子を僕に被せてきた。

「案外似合うじゃないか」

「そういえば、帽子は被ったことが無かったなあ……ふむ」

「何が『ふむ』だよ」

魔理沙の帽子を深く被ったりしながら呟く僕に、魔理沙は小さく笑った。そんな魔理沙に帽子を返し、お茶が来るまでたわいない話で盛り上がることにする。

話の内容は正直何でもよかった。

弾幕はやっぱパワーだぜと熱く語る魔理沙に、いやスピードも必要だと反論する僕。だんだんとヒートアップする弾幕持論に、やがて喧嘩腰になりかけ、茶屋の人に怒られて二人で笑ってみたり。かと思えば全く会話が無く、ただただ魔理沙が僕の耳を触り続けてみたり。逆に僕が魔理沙の髪を三編みにして遊んでみたり。たかだかその程度のことなのに、魔理沙が相手だとそれがとても面白い。もしかしたら話や行動の中身はどうでもよくて、魔理沙と一緒にいるから楽しいのかもしれない。いいや、きっとそうなのだろう。

そんなことを考えながら、少し前にきた団子の串を手にとると、すでに団子の姿はそこに無かった。横には素知らぬ顔で口をモゴモゴと動かしている魔理沙の姿。

「こら」

「何のことだかさっぱりだぜ」

白状しそうになかったので、魔理沙の口元に付いていた餡をとある方法で取ってやった。

顔を真っ赤にして身体を震わせている魔理沙を無視し、唇をぺろりと舐める。うん、甘い。

で、ひとしきりお茶も堪能してのんびりしているとところに。

「さあさあ！ 他に挑戦する奴はいないのかい！？」

店の外から聞こえてくる威勢の良い声に、僕の耳がピクリと反応する。先程から店の外が騒がしいとは感じていたが、原因はあいつかと息を吐いた。

そんな僕を見て、不思議そうに首を傾げる魔理沙。

「なんだろうな。叩き売りでもしてるのか？」

「いいや……見た方が早いかな。行こう」

机の上にぴったりの勘定を置き、店を出る。

店の外にいたのは、予想通りの二人だった。その内の一人が僕に気が付き、頭の角を掻きながら近付いてくる。

「ミコトじゃないかい。アンタも挑戦してみるかい？」

「いや、まず何をしているのかと」

近付いてきた鬼 桃鬼にそう聞くと、彼女は親指をクイツと立てて後ろにそれを向けた。そこには、何やら腰の辺りに一本の紐を垂らしたもう一人の鬼 志妖の姿が。

志妖の正面には一人の男があり、二人を囲む地面を削って作られ

た円。志妖は飛び掛かる男を華麗にかわし、男は勢い余って円の外へと転がり出てしまう。瞬間、沸き上がる歓声。

「志妖の腰から糸を奪えば勝ち。志妖は相手を円から出せば勝ち。けれど、志妖からは相手の身体には触れられない。志妖から接触するか、腰の紐を取られたりしたら志妖の負け。どうだ、わかりやすいだろう？」

「またそんなことを……」

「ハッハッハ！！ 皆どんどん挑んでくるよ？ 参加料は酒か食料。勿論金でも構わない。どうだい、一戦挑んでみないかい？ アンタなら勝てるかもしれないよ？」

ニヤニヤしながら僕を誘う桃鬼。が、しかし。

「ああいや…… やっぱりアタシが相手をしよう」

「どうしたのいきなり」

「ちよつとねえ…… アンタ、その人間と契りを交わしただろう？」

志妖はそれが気に入らないみたいでねえ…… 少しばかり、危な」

「ミコトさん？」

「ッ！！」

豪ッ！！ と、凄まじい妖気が風となって吹き荒れる。

額から汗を垂らしながら、桃鬼と共に声の主を見る……

「やはりミコトさ」

「お休みなさいッ！！」

志妖がこちらを指差すと同時、桃鬼は叫びと共に志妖の首筋を手刀で一撃。一瞬波動が飛んでくると本決で身構えていた僕は、桃鬼のファインプレーを見て肩を落とした。後ろでは魔理沙が八卦炉

を構えている。気持ちはわかるがとりあえず事情を説明してしまわせた。

波動とレーザーの二大砲から人里を救った僕等。

桃鬼はひとつ息を吐くと、倒れた志妖から糸を取って僕を見る。

「さて、気を取り直して……挑戦するかい？ アタシからこれを奪うことが出来れば、特別に素敵なモノをプレゼントしよう」

「参加料は？」

「アンタが負けたら貰うことにする。どうする？」

チラリと後ろの魔理沙を見ると、どうぞと言わんばかりに箒に腰かけていた。完全に傍観姿勢である。

「やるよ。すぐに終わっちゃうかもしれないけど」

「言うじゃないか。なら……」

僕が円へと足を踏み入れると、桃鬼は手に持った糸を腰には無く、その深い胸元へと……って。

「何してんの」

「アタシの服は上から下まで全部繋がってるからね。しまう場所といたらここしかないのさ」

「だったらせめて糸の先を出してくれない？」

全部しまわれると、完全に突っ込まないと糸が取れないじゃないか。魔理沙がいる手前そんなことはできない。

しかし、桃鬼はこちらの言い分など聞く気は無いらしい。よいしょと胸の位置を調整している彼女に、良い意味でも悪い意味でも視線が集まる。

思わず魔理沙の方へと振り返ると、彼女は自分の胸元に手を当て

ながら桃鬼へと熱い視線を向けていた。若干頬を赤く染めているものの、その視線は嫉妬というより羨望のそれ。耳を澄ませば「おお……」なんて呟きが聴こえてきそうな表情をしている。

まあ、それはそれとして。

「桃鬼。せめて手首とかにしてくれない？ 流石にこんな状況でそこに手をつ突っ込む気にはなれないよ」

「……ほほお？」

僕の言葉を聞いた桃鬼が、ニタアと唇を歪ませる。嫌な予感がするなあと思ったところで、彼女は糸の先を少しだけ出して前屈みになり、

「なら、誰も見てないところなら」

「……………」

「わかったわかった。そう怖い顔をするな右手を下ろせ」

無表情で右手を前には突き出すと、桃鬼は笑いながら糸を抜き出した。

全く、何を言い出すかと思えば……いや、桃鬼らしいといえそうなのかもしれないけれど。今はストッパー役の志妖が役に立たない状況な為に、桃鬼節に歯止めが聞かないみたいだった。

溜め息をついてから桃鬼と向き直る。彼女は糸を手首に結び付け、こんなもんかと呟いていた。

「けど、これじゃあアタシが不利だねえ……………」

「……………」

右手を軽く振り、不満げに呟く桃鬼。次に何を言い出すのかわか

っている僕は、あえて何も言わずに黙っている。そんな僕に桃鬼はゆっくりと歩み寄り、頭の角が僕の額に刺さりそうな……言ってしまえば、吐息が直接感じられる超至近距離で口を開いていた。

「どうだい……？ アンタも、リスクを背負ってみないかい？」

挑発的でしかどこか誘っているかのような妖しい眼差し。元が綺麗な癖に、狙ってこんな魅力を振り撒けるのだから始末におえない。

……まあ、僕には魔理沙がいるから、いくら魅力を振り撒かれようが効きはしないのだけれど。

「……何をすれと？」

「なあに、簡単なことさ」

互いに身を引かず、そのままの距離で会話する。見るだけ見れば、二人の関係が疑われそうな光景だろう。しかし、既に僕らの中には浮ついた感情なんて存在しない。桃鬼の蠱惑的な笑顔は好戦的なそれへと変わり、口から覗く尖った歯がキラリと光る。そして、僕の耳元に口を寄せ

「なっ」

思わず声が出て、その反応に桃鬼が笑う。それというのも、耳元で囁かれた内容が、予想外で、尚且つ信じられないものだったからで。

思わずもう一度魔理沙の方を振り返れば、彼女は不思議そうに首を傾げてこちらを見返していた。

「今更止めるなんて言わないだろう？」

「いや、けど」

「負けなければいいだけの話じゃないか。それともなにかい、勝つ自信が無いとでも？」

あからさまな挑発。いや、違う。これは挑発なんて生易しいものではない。今更逃がすつもりはない。そう、彼女は言っている。

仮に今ここで引いたところで、彼女はどこかしらでそのツケを払わそうとしてくるだろう。それで、今耳元で囁かれた内容を求められたりしたら……僕はきつと、それを断ることは出来ない。

僕の性格を知り尽くした桃鬼ならではのやり口。参った、これでは勝負するしか道がないではないか。

そこまで考えて、桃鬼の顔を見る。そこには、してやったりと言わんばかりの満足げな表情があった。

「……手加減しないよ」

「望むところさ」

瞬間、僕の身体から吹き上がる妖気。周りの野次馬がどよめき、魔理沙もいきなり戦闘モードに入った僕を見て目を見開いたが、そのどちらも知らんぷり。この勝負、魔理沙の為にも僕の為にも、負



けるわけにはいかないもので。

「ふむ。流石にこれじゃあ狭すぎかねえ……。そら」

桃鬼が何気ない仕草で右手を振り上げる。瞬間、僕等を中心に円を描くように土煙が上がった。目測で半径が五メートルあるかないかの円が現れる。元の円が三メートル弱といったところなので、それに比べればかなり広くなっている。確かに、これだけあれば逃げ道も増えるだろうし、何より周りで見ている人達に被害がいかない……。まあ、僕が妖気を出した辺りから皆さん少しずつ後ろに引いていつているので、それは最初から大丈夫なんだろうけど。

「じゃ、始めようか。ああ、言っておくけど」

「能力は無し、だろう？ お互いに困るからね」

「……随分やる気じゃないか」

「あんなこと要求されたらねえ」

言いながら、手を地面について四つん這いの体勢を取る。全開とは言わないまでも、それなりの妖力を脚に込め

「ッ！！」

突撃を仕掛けるよりも先に、桃鬼の拳が頬を掠めていた。

意表をつかれた僕は、地面を蹴ってラインギリギリまで後退する。そして叫んだ。

「そっちから手を出すのアリ！？」

「じゃあ聞くけど、アンタが自滅することは有り得るのかい？ いや無いね！ なら、こっちからも手を出すしかないじゃないか！」

「っ……」

滅多にしない舌打ちをして、襲い来る桃鬼から距離を取る。  
なんてことだ、勝つ自信があったからこそこんな勝負を受けたというのに。桃鬼の一撃なんてくらったら、円から出るどころか人里から退場することになってしまう。こやつ、やる気どころか勝つ気満々ではないか。

「さあさあ！ 取れるものなら取ってごらんよ！」  
「……言ってる！ すぐに終わらせてやるよ！」

とにかく、こんなところで時間なんて使ってられない。言った通りにすぐに終わらせて、魔理沙とのデートに戻らなければ。

なんて、意気込んでたのも今は昔。

僕は今、あの勝負を受けたことをものすごく後悔してたりする。

「ま、魔理沙」  
「……」

「…………その」

「……………」

「うう……………」

真つ暗闇とは言わずとも、夕闇の薄暗い中を歩く僕と魔理沙。けれど、朝のように並んで歩いているわけではない。当然、手も繋いでいない。僕よりも一歩先を歩いている魔理沙は、出会った時のように帽子を目深に被っている。なので、正直どんな表情をしているのかは全くわからないのだが……

「……………」

……この沈黙が全てを物語っているので、表情を見る必要もないといえますか……。

……まあ、早い話、彼女はとんでもなく怒っているのだった。

痛々しい沈黙が四方八方から僕に襲い掛かり、けれどもそれを打ち破ることが出来ずに黙り込んでしまう。

魔理沙から流れ込んでくる感情は、僕を内側からこれでもかと責め立ててくる。それは歩くことすらも億劫に感じる程に僕を落ち込ませ、それでも立ち止まればきつと魔理沙は僕をおいてきぼりにするだろうから立ち止まれない。

「……………」

無言で僕の半歩を歩く魔理沙。幕に乗らずに歩いてくれているあたり、まだマシと言えた。この状況で空を飛ばれでもしたら、きつと僕はその場で立ち止まってしまっただろうから。

はあ、と蝋燭の火が揺らぐ程度の弱々しい溜息をついて、着物の

内側に手を差し込む。ここに入っているものを手に入れるために、あんなに長い時間戦い続けていた。『コレ』を魔理沙に渡せば、きっと喜んでくれる。そう考えていたんだけど……。それで、本来ならデートに使う一日を潰してしまったのだから、魔理沙が怒るのも無理はなかった。

……『コレ』は、本当なら、もう魔理沙へと渡していたはずなのにな……。

そんな考えが頭を過ぎり、気が付けば足音はひとつ消えていて。ハッとして顔を上げれば、愛しい人の背中では随分小さくなっている。

「……………ハハ」

不意に零れた笑いは、それはそれは情けなく。これが泣き笑いというものかと、湿った思考で理解した。

……参った。僕、こんなにも魔理沙に依存してる。

笑う魔理沙が可愛くて。

照れる魔理沙が可愛くて。

怒った魔理沙も可愛くて。

ただとにかく、彼女の全てが愛おしくて。

……それこそ、言葉にしたらキリがないくらいに、彼女の存在は僕の感情を掻き乱す。

周りから見れば、それはそれは滑稽な姿であろう。幾億もの他人の感情を操ってきた、仮にも大妖怪と言われる存在の僕が。

魔法使いとはいえ、たった一人の人間に、これ以上ないくらいに心を掻き乱されている。

ふと空を見上げて見れば、そこにはきらびやかな幾多の星が。

「……独りじゃあ、そこまで綺麗に見えないな」

自分勝手な言葉を吐き出した僕は、地面を蹴ってその場所を後にした。

「……………あれ？ ミコト？」

気が付けばひとつとなっていた足音に、魔理沙はふと振り返った。

「あ……………」

呆けた声を出したのは、それが予想外のことだったからか。

誰もいない道をしばらく見つめ、キョロキョロと辺りを見回す彼女。

極端なまでに足音が小さい彼。だから、その足音が聴こえなくなっても振り返らずに歩き続けていた。

少しばかり、虐めてやろうかな、なんて。

本当はあまり怒ってなんかいないけど、でも、文句が無いわけじゃあ無かったから。

そんなことを考えながら、魔理沙は少しでも早めに歩いていったのだ。

本当は、隣を歩きたかった。

並んで歩いて、手を繋いで。

あわよくば、腕組みなんかを狙ってみたりして。

それらを少しでも我慢して、ちょっぴりいじわるしてみただけなのに。

「……………根性無し」

本当にいなくなるなんて。

今ならまだ許すから、冗談止めて出てこいよ。

声には出さず、立ち止まったまま唇を噛み締める。

当然、ミコトは現れない。

弱々しい虫の音が、ただ夜の道に響くだけ。

そんな孤独な夜の道に、魔理沙はしばらく立ち尽くしていた。

## 白黒灰色：角を丸くする為に

あの日から、一体何日経っただろうか。無気力に過ごすあまり、時間の感覚も鈍くなっているみたいだ。

「ミコトさん」

「……？ 藍か」

下から聞こえてきた声に、ひとつ遅れて反応する。

首だけを傾けて声の主を確かめた僕は、寝転がっていた木の枝から飛び降りた。

「何か用かい？」

「いいえ、特には」

さらりと答えた藍は、飛び降りたまま座り込んだ僕の隣に腰を降ろした。

互いの距離は、あともう一人座れる位に空いている。橙が座れば丁度いいような空間だ。

「……………」

この微妙な距離感は、僕が魔理沙と恋人になった翌日から現れた。それまでは、肩が当たる位には近く、また彼女の尾が当たる程度には近い位置。

どちらが何かを言ったわけではない。ただ、自然と彼女と物理的に距離が開いただけの話。

別に、それを悲しいこととは思わなかった。

誰か一人を選んでしまえば、他とは当然距離が開く。それをわか



った上で、僕は魔理沙と一緒にあったのだ。

……けれど、少し、情けない話ではあるのだけれど。

「……………」

……今ばかりは、この距離が、悲しいものに思えて仕方がない。

と、そこで右手の甲にフワリとした感触が。まるで筆でさらりと撫でられたかのような感触に、ビクリと肩を震わせる。

なんだ、と思って右を見れば、そこにはなんだか近めの藍の姿。いつからか見る事が無くなっていた、至近距離での藍の顔。

「ミコトさん、聞いてました？」

その顔は、少しだけむくれていた。

どうやら考え込んでいたせいで、藍の話を全て聞き流していたようだった。いや、それにしても。

「ククッ……………」

「何がおかしいんです！？ もうつ」

更にむくれた藍は、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

だって、久しぶりに見た顔がむくれていた、なんて。  
そう考えると、なんだかとてもおかしくて。

「クク……アハハハッ」

「だから何が!!」

そつぽを向いたはずの藍が、とうとう笑い出した僕に詰め寄る。  
グイ、と肩を押された僕の身体は、あっさりと地面に倒れ込んだ。  
それでも笑い続ける僕に、藍はせめてもの抵抗に僕の身体をぐい  
ぐい揺さぶる。

そういえば、ここ数日こうして笑っていなかった気がする。  
ただひたすらにじっとして、何かを考え込んでいるようで、その  
実何も考えることが出来なくて。

まるで感情が、ついでに表情までもが凍り付いてしまったかのよ  
うに、あの日からずっとそうして過ごしていたのだ。

そう考えて、ふと、前に笑ったことを思い出す。  
今みたいに、くだらないことで笑って。けれど、今のようにな  
人で笑っていたわけでは無くて。

そう。僕は、隣にいる彼女と 魔理沙と

「……はあ。やっぱり、ですか」

「え？」

「どうにも様子がおかしいと思えば……。まだ、仲直りしてない  
ですね」

「……………」

呆れたように息を吐く藍。揺さぶっていた手を離し、少し乱れた前髪を直している。

どうやら、藍は全て『お見通し』らしい。

「当然です。あんまりにもミコトさんがへたれているので、見てられなくなりました」

「酷いなあ。……否定はしないけどさ」

藍のストレートな物言いがグサリと胸に突き刺さる。確かに、自分でも情けないとは思っていたが……。面と向かって言われると、少し、ねえ。

「誰にも言っていないんだけど……どこで知ったの？」

「知ったと言うよりは……まあ、女の勘です」

「何をまた……読心術使ってたくせに」

「うつ……………」

藍の耳がピクリと動く。ばれてないとも思ったか。へたれているのが、一応は万を生きた妖怪。しかもその手の術は僕が得意とするところである。見逃すことなんて、ありえはしない。

……とはいえ、それを防ごうともしなかった辺り、やつぱりへたれていたんだなあ、僕。

「なんで謝りに行かないんです？ 詳しくは知りませんが……」

「うん……いや、悪いのは確かに僕なんだ。けど、なんだか……怖くてね」

苦し紛れに笑いながら、渋々本音を呟いてみる。

そう。わかってるんだ。悪いのは僕で、謝りにいくのも当然僕。そこまではいい。ただ、そこから先はわからない。僕が謝ったところで、許す許さないは向こうが決める。

もし、許してくれなかったら。

安易と取られ、もっと怒らせてしまったら。

そんな可能性を考えてしまうと、どうにも足と後ろ髪が引つ掛かる。

まるで思春期真っ盛り。何千年も生きてくせして何を言っているのかという話だが……これはどうにも、仕方が無い。だって、本当に怖いんだから。

「……はあ。全く、変なところで臆病なんだから……」

「……む」

「私は少し失礼します。いつまでもこんなところにいないで、マヨヒガに戻ってみたらどうです？ 橙も寂しがつていますよ」

僕が少しムツとするのを見た藍は、すまし顔で立ち上がって歩き出す。

その背中に口を開いた僕だったが、どうにも捨てる台詞が見当たらない。完全な負け戦だと悟った僕は、ひとつ溜め息をついてゆっくりと立ち上がる。

「橙が寂しがつてるなら……まあ、仕方ない、か」

そう呟いて、いつもよりも控え目に地面を蹴る。

妙な脚のけだるさが、いかに何もせず黙っていたかを教えてくれていた。

ところかわって、とある店。

幻想の郷には似合わない……と、言うよりは。ある意味異質なもののばかりが集う、見様によつては不気味ととられかねない店 香霖堂に、彼女の姿はあった。

「聞けよゝなあゝ聞けつてばゝ」

「うるさいな……久々に顔を出したかと思えば……。今日はミコトのところにはいかないのか？」

「そんなこと言う自体、私の話を聞き流してる証拠だぜ……」

ガッタンガッタン、と逆に座り込んだ椅子で床を打ち鳴らす魔理沙。

そんな彼女には特に視線を向けずにいる男こそ、この香霖堂の店

主　森近　霖之介である。

手元の本をペラペラとめくりながら、時折魔理沙に対して適当な返事を返している霖之介だったが……正直な話、彼はイライラしていた。

それも当然。彼は少し前まで、毎日のように現れる魔理沙から、それこそ延々とその日あったことを語られていた。それだけなら、彼もまあやぶさかではない。視線こそ本に向かっていたとしても、彼は微笑みながら、彼女の声に耳を傾けていただろう。

しかし、話の節々、いや、もはや文章で言う段落単位で彼女の『想い人』の名前が出てきては、さすがに辛い。いわゆる、ノロケ話である。

別に彼女の『想い人』　ミコトのことは嫌いではない。むしろ、好意的な妖怪であると、霖之介は思っている。しかし、それとこれとは話が別。初対面では思わず舌打ちしそうになった程に、ノロケによるストレスは溜まっていた。

しかし、それもここ数日は収まっていたので、霖之介はすっかり油断していた。

「どう思っよ霖之介！　なあ、聞いてんのか！」  
「……………」

ノロケの次は、愚痴。

フェイント後のクロスカウンターを食らった。そんな気分の霖之介だった。

「失礼するぞ」

「いらつしゃい……。悪いけど、今日はもう店終いしようと思って  
いるんだ」

「ああ、大丈夫だ。すぐに終わる」

あれから結局散々愚痴を言い続け、それでも帰ろうとしない魔理沙を無理矢理店から押し出した霖之介に、また新たな客人が訪れた。彼にしては珍しく、本をカウンターの脇に投げてぐったりとして  
いるところに客である。言うてから、少々不躰だったかなと考える  
も、いいやこれは仕方ないことだと謝罪する気もあまりない店主。  
しかし客人はそんな店主に怒りもせず、苦笑しながらカウンター  
の前にある椅子に座り込んだ。言わずもがな、魔理沙が引つ張り出  
してきてそのまま放置していったものだ。

「なんだい？ 品定めか何かかな」

「いいや、違う」

「なら、交渉かい？ 悪いけどここにあるものは……」

「それもまあ、違うな」

「なら……」

ならなんだ、と顔を上げる店主。ちなみにこの店主、今の今まで  
突っ伏していた為に客人の顔を見ていない。そのために、目の前に  
いる客人の姿を見て一瞬身体が固まったのも、致し方ないことだっ  
たのかもしれない。

「……どうかしたか？」

「あ、ああ、いいや……。すまないね。あまりに予想外の来客だった

ものだったから」

頭を掻きながらそう返す霖之介に、客人は小さく九本の尾を揺らす。数多の妖怪がひしめく幻想郷と言えど、九本の尾を持つ妖獣は一体しか存在しない。

客人　八雲藍　は、両袖に手を隠す独特の体勢を崩さずに、姿勢を正した店主に向き直った。

「そこまで硬くならなくともいいさ。私はただ、少しばかり話をしにきただけなのだから」

「話……かい？」

「ああ。それも、とても大切な話だ」

藍の言葉に、霖之介は小さく首を傾げた。それというのも、彼女と彼女はこれが初対面。いま出会ったばかりの関係なのに、そこまで大切な何かがあるのだろうかと考えたからだ。

そんな霖之介に、藍は一枚の写真を霖之介の前に差し出した。

「……これは」

それを見た霖之介は、ああ、そういうことかと納得する。

「成る程……貴女とはそういう繋がりがあったか。随分と遠回りで、か細い糸みたいな繋がりだけど」

「全く持つてその通りだがね。だが、そんな繋がりの方が、今回に限っては望ましいのさ」

「……うん。大体、話を読めてきたよ。貴女が何を考えているのかも、ね」

写真をヒラヒラと手で弄びながら、肘をついて苦笑いする霖之介。



目の前の藍も、少しだけ困ったように笑っている。

「少し、待っていてくれ。お茶でも入れてくるよ」

「ありがたいが……いいのか？ 店終いではなかったのか」

「ああ、今日はもう店終いさせてもらうよ。邪魔が入らないように、ね」

言いながら、店の奥へと消えていく霖之介。残された藍はひとつだけ息を吐き、自分の勘が当たったことに安堵するのだった。

「……私と同じ立ち位置にいる人がいてよかった。一人で丸く収めるのは、正直酷だしな……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8352y/>

---

東方灰景番外集

2011年11月29日22時48分発行